

2017年3月18日

アイヌ漁業権回復を目指して

宇梶静江

首都圏から参加しました宇梶静江です。前回に続き、この会議で発言する時間をいただき、ありがとうございます。丸山先生、吉田先生、その他事務局の皆さまに感謝申し上げます。

ダコタ・アクセス・パイプラインのことは島田あけみさんに話してもらうことにして、私はアイヌ漁業権についてお話しさせていただきます。前回、畠山さんが漁業権について魂を込めて話されました。それを聞いて本当に感動しました。そして、私たちの先祖の生業だった漁業、特にサケ漁の権利回復に向けて、私たちアイヌが動き出さねばならないと思いを新たにしました。

すべて文化というものは日々の暮らしから生まれます。とりわけ、先住民族の文化はそうです。自然やカムイが身近に感じられる暮らしから切り離されたアイヌの文化には力強さがありません。私の父親は山の仕事が終わってお金が入ると、そのお金で魚や酒を買って、近所のアイヌのおじさんやおばさんたちにふるまっていました。夜を徹して語り、歌い、踊ります。その踊りのダイナミックなこと、いまのアイヌの踊りとは全然違います。体からほとばしるエネルギーから生まれる踊りです。まさに生きた踊りです。暮らしのなかにある踊りです。

しかし、アイヌ文化は、暮らしから切り離されて、博物館に飾られるものになってしまいました。現在、アイヌ政策推進会議が進めているアイヌ政策のかなめが博物館を中心とした「象徴空間」であることは、そのことをよく表しています。

アイヌがアイヌとして生きるすべを手に入れたときにはじめて、アイヌ文化が生きたものとなるのです。アイヌ語はすたれてしまいましたが、アイヌの刺繍、木彫り、歌・踊りは私たちの間に受け継がれてきました。しかし、おおもとのアイヌとしての生活がなければ、アイヌの刺繍、木彫り、歌・踊りも細ってしまいます。形をなぞるだけのものになってしまいます。

もし、政府がアイヌの文化を推進したいと思うのなら、その文化を支えるアイヌとしての暮らしも保証されなければなりません。

北海道の河川一本、二本でもいい、そこで独占的にサケ漁をする権利を取り戻したい。そうすれば、アイヌに力が戻ってきます。住宅資金、奨学金も大事です。でも、福祉対策だけでは、アイヌがアイヌであることに喜びを感じることはできません。私は、まだ私の生がこの世に残っているあいだに、同胞がアイヌとして生きる喜びを感じられる日が来て欲しいと切に願っています。

現在、アイヌ政策推進会議がまとめようとしている政策は、先住権にもとづくものではないと聞いています。「象徴空間」を全面的に否定はしません。でも、私たちは、何十億円もかかる大きな箱ものを、ほかのことに優先して作ってもらいたいと本当に望んでいるのでしょうか。

アメリカでは、アメリカ・インディアン博物館が2004年にオープンしましたが、博物館建設のための法律が出来たのは1989年だとのこと。それまでにいろいろな先住民族政策の積み重ねがあり、そのうえに立って博物館計画が構想されたのだと思います。まず博物館から作ろうという日本とは大違いです。博物館はもっとあとでいいと私は言いたい。

「象徴空間」の建設準備は着々と進んでいます。建設を止めることはもう難しいかもしれません。でも、それ以外にアイヌが望んでいることがあると政府に要求することは可能です。私はアイヌの同胞に訴えたいんです。アイヌの漁業権を取り戻すために立ち上がろうではありませんか。

漁業権の回復にはさまざまな法律問題が横たわっています。それを解決するには、学者の先生や弁護士の協力が必要です。この市民会議に弁護士の先生が参加しておられるでしょうか。アイヌの先住権要求は基本的に法律の問題です。ぜひ、弁護士の先生方に加わってほしいと思います。

もう一つ重要なことは、権利の受け皿となるアイヌの組織づくりです。アイヌが集団として漁業権を行使するには、明確な組織が必要です。北海道には、北海道アイヌ協会と各地のアイヌ協会がありますが、権利行使の組織として存在しているわけではありません。もし、漁業権回復を政府に要求するとしたら、漁業権という先住権を行使するためにどんな組織が必要なのか、既存の組織でいいのか、新しい組織を作らなければいけないのかを話し合っ、合意を形成しなければいけません。

アイヌが合意を形成することがいかにむずかしいか、私はこれまでの人生でいやというほど経験してきました。それは、アイヌが長い差別と収奪の歴史のなかで分断されてきたからです。しかし、それを乗り越えないとアイヌには未来がありません。アイヌがアイヌであるためには、和人まかせの運動ではだめです。アイヌの漁業権回復を目指して、アイヌが主体である運動を立ち上げたい、そのためにこの市民会議のお力を借りたいと思います。

このところ、天国からのお迎えの夢で目が覚めます。私にはもう長い時間は残されていません。体も弱っています。でも、私たちアイヌが日本の先住民族であるためにまだやることがある。いま、アイヌ民族の将来が決まる重要な岐路に立っている。そういう思いで必死に生きています。同胞の皆さんに心からのお願いです。先祖から受け継いだアイヌの魂と豊かなアイヌ文化を子孫に受け渡せるように、アイヌの暮らしを取り戻す、その第一歩としてアイヌの漁業権の回復のために立ち上がろうではありませんか。